神奈川県立総合教育センター研究集録 25:49～52.2006

児童の国語力の向上を図る学習指導法の研究

―― 「話すこと・聞くこと」領域における伝え合う力を高めるための手だての工夫 ――

藤　本　謹　吾[1]

学習指導要領の見直しに当たっての検討課題として、さらなる国語力の育成が挙げられている。すべての知的活動の基礎となる国語力の向上は喫緊の課題であり、特に国語科において育成する力は、国語力の核となるものである。本研究では、国語科の目標に挙げられている「伝え合う力を高める」ことが、国語力の向上に大切であると考え、小学校国語科の中学年における「話すこと・聞くこと」領域での効果的な学習指導法を検討した。三つの授業実践を通して、手だての工夫により、児童の伝え合う力が高まることを検証した。

はじめに

平成16年５月に出された文部科学省の『「確かな学力」と「豊かな心」を子どもたちにはぐくむために･･･』は、確かな学力を飛躍的に向上させるための総合的施策の一つとして国語力向上推進事業を挙げている。

この事業は、学校の教員等を対象とした「児童生徒の国語力向上に向けた教育の推進のための指導者の養成を目的とした研修」や、読書活動推進のための学校・家庭・地域が一体となった総合的な取組等を、平成15年度より実施している「国語力向上モデル事業」に加えたものである。

神奈川県は、『神奈川力構想・プロジェクト51』(平成16年３月)の中で、主要施策「確かな学力の向上を目指す教育の推進」の構成事業として国語力の向上を挙げ、国語教育推進校を指定し、指導事例の作成やその成果の普及を目指している。

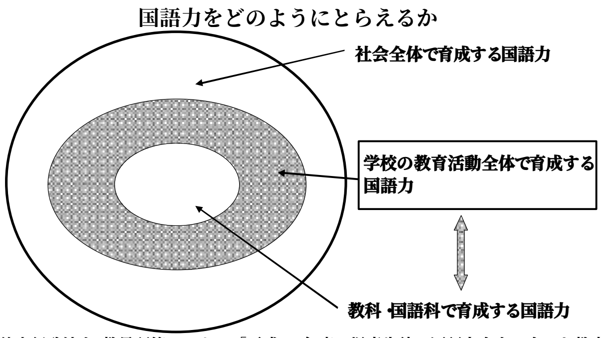
自分の考えや意見をとりまとめたり、表現したりする力など、すべての知的活動の基礎となる国語力の向上は喫緊の課題であり、そのためのカリキュラム及び学習指導法の開発が重要になっている。

研究の目的

国語力には、「社会全体で育成する国語力」、「学校の教育活動全体で育成する国語力」、「教科・国語科で育成する国語力」があり、中でも、「教科・国語科で育成する国語力」が国語力の核とされている(第１図)。

小学校学習指導要領は、国語科の目標を「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる」としている。

国語力の向上を図るには、「伝え合う力を高める」ことが大切であると考える。特に、仲間、友だちとの結びつきが強くなり、児童が社会性を身に付けていく時期に「伝え合う力を高める」ことが重要であると考え、本研究では小学校中学年における、学習活動の中での手だての工夫の有効性について研究を行った。



独立行政法人 教員研修センター「平成 17 年度　児童生徒の国語力向上に向けた教育の推進のための指導者の養成を目的とした研修（東部ブロック）」資料より

第１図　国語力のとらえ方

研究の内容

1　伝え合う力について

伝え合う力について、小学校学習指導要領解説国語編では、「人間と人間との関係の中で，互いの立場や考えを尊重しながら，言語を通して適切に表現したり正確に理解したりする力である。」としている。また、小森茂は、伝え合う力について「言語コミュニケーション能力のことである」(小森 1999)と述べ、その力を高めるために、次のような「五つの言語意識」を学習指導案に位置付けることを提案している。

①　自分にとっての相手意識 ②　(①を受けた)目的意識 ③　(①、②を受けた)場面や状況意識、条件意識 ④　(①、②、③を受けた)相手や目的、場面や状況、条件などを考えたり、判断したりしながら、意図的・計画的に話したり、相手の話の意図や要点を的確に聞き取ったりするための方法や技能意識

1　基本研修課　研修指導主事

⑤　(①、②、③、④を受けた)相手や目的、場面や状況、条件などを踏まえ、自分の言葉で意図的・計画的に表現したり理解したりする言語行為になっているか等を自己評価（相互評価も含む）する評価意識　　　　　　　　　　　　（小森 1999）

これらのことから、本研究では伝え合う力を次のように考えることとした。

○伝えたい相手に自分の思いを伝えることができる力

○相手の思いを聴いて理解することができる力

○理解したことを相手に返していくことができる力

2　領域及び伝え合う力を高めるための活動

伝え合う力を高めるための学習指導法は、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の３領域それぞれにおいて考えられるが、小学校中学年は、友だちとの言葉のやりとりも増え、その中で人間関係が作られていく時期であることを踏まえ、本研究では「話すこと・聞くこと」領域に絞り、活動については、「ごっこ活動」、「ゲーム活動」を取り入れることとして仮説を立てた。

3　仮説

「ごっこ活動」、「ゲーム活動」の中で教師が題材や活動の場、評価等の工夫をすることで、伝え合う力を高めることができるであろう。

「ごっこ活動」、「ゲーム活動」自体が、児童にとって楽しく取り組めるものである。しかし、活動の楽しさだけでは、伝え合う力は高まらないだろう。活動の中に、「相手の思いを聴いて理解することができる力」や「理解したことを相手に返していくことができる力」を高めるための、手だての工夫を取り入れて授業を展開し、その有効性を検証した。

4　検証

３人の調査研究協力員の実践により検証した。各単元の指導・評価計画及び評価規準等は省略し、単元名と伝え合う力を高める具体的な手だてを「手だてキーワード」として示し、概要と成果及び課題について報告する。なお、３事例とも、実践は第３学年である。

実践事例１　単元名　「インタビューごっこ」

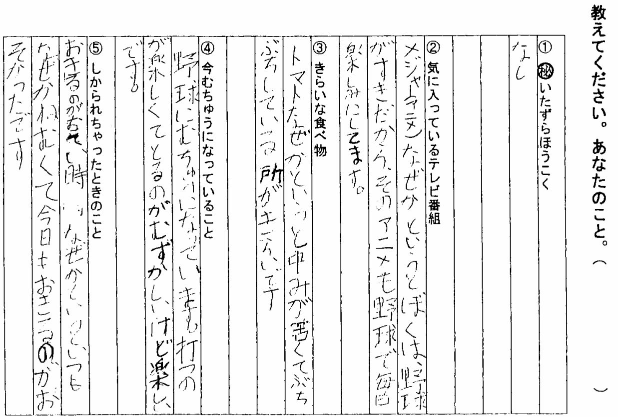
手だてキーワード

(1) 言葉あてゲーム

カードに書かれた言葉(学校にある物や、学校での活動)を当てるゲーム。出題班の児童が一人ずつ各班に行き、３分程度質疑応答をする。回答班の児童は質問を工夫して、言葉を当てる。

(2) 質問合戦

５種類の題材について、児童はあらかじめ簡単な答えを用意しておく(第２図)。話し手となった児童はカードを１枚選び、そこに書かれている題材について、用意した答えを基にしながら、質問に分かりやすく答えていく。



第２図　児童が用意した回答(例)

社会科の学習で、農家の方に質問をした際、自分たちが用意した質問に対する返事を得ることだけで満足してしまう児童が多く見られた。回答に対してもっと掘り下げて聞き、より深く理解しようとする姿勢が弱い。また、インタビューというと、話し手が主体で聞き手が受け身と捉えがちであるが、聞き手側の質問の仕方や内容が大切なことを理解させることが必要であると考え、言葉あてゲームを行った。「答えを当てるためには分かるような聞き方が大事だ。」ということや、話し手は「様子を分かりやすく伝えなければいけない。」ということに児童は気付いた。

また、質問合戦では、用意した答えだけでなく、相手が状況を想像できるように、その場で言葉を考えて伝えることの大切さや、聞いたことを整理して考えをまとめ、次の質問をしていくことの必要性に気付いた。

言葉あてゲーム、質問合戦ともにグループ活動を取り入れたことで、児童全員が「話す」、「聞く」両方の立場を経験できた。事後の感想からは、想像しながら主体的に聞いたり、相手意識を持って自分の思いを伝えたりしながら、お互いに分かり合うことが「話す・聞く」の活動であることを児童が理解したことが読み取れた。

この活動後に行った社会科の「お店たんけん」では、店の人への質問が、一問一答式ではなく、掘り下げて聞く形に変容した児童が多く見られた。

課題としては、学習カード等の活用による振り返り場面の設定、また、ここで培った伝え合う力をさらに高めていくための場の設定が挙げられる。帯単元等を利用した継続的な取組が必要であると考える。

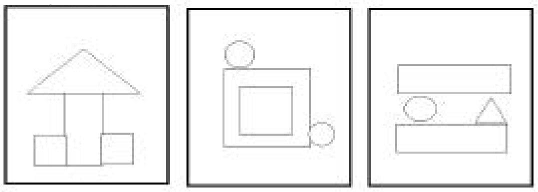
実践事例２　単元名　「図形を使ったお絵かきゲーム」

手だてキーワード

(1) お絵かきゲーム

４つの図形を組み合わせた絵を使用する(第３図)。出題者は友だちに正しく絵を描いてもらえるよう、分かりやすく説明する。

図形　1　　　図形　2　　　図形　3



第３図　「お絵かきゲーム」使用図形(例)

(2) スピーチメモ

説明をより分かりやすくできるように、児童はスピーチメモを作成した。10文字程度の箇条書きとし、グループ内でスピーチメモの検討を行い、練り直す活動を組み込んだ。

(3) 帯単元

ゲームの流れの理解と、スピーチメモの作成までは１時間単位で扱い、ゲームの時間については15分の帯単元とした。

児童は算数科で長方形、正方形、三角形、直角三角形、直線等の図形についての学習を終えたところであるので、説明にそれらの用語を用いることができると共に、図形への知識理解も深まった。

スピーチメモの作成に当たって、グループで検討する時間を設定したことは有効であった。友だちのアドバイスを好意的に受けとめ、自分のメモを訂正する姿が多く見られた。また、図形を説明する順番が児童によって異なることから、話し合い活動が生まれ、どの順番で説明するのが分かりやすいか話し合うグループもあった。教師の意図を超えて、伝え合う力を高める活動が成立していったと言える。

簡潔な説明を心掛けるために、箇条書きに10文字程度という条件を付けたことは良かったが、「程度」という基準は難しかった。そのため、一人ひとりの実態に合わせて教師が言葉掛けを行った。

帯単元として実施したことで、児童の興味・関心が持続した。児童はどのグループがどんな絵を出題するのかを楽しみにしており、出題者のスピーチが始まると教室は静まりかえり、黙々と鉛筆を走らせていた。「みんなが真剣に話を聞いてくれたから、うれしかった。」という感想も多く出された。

課題としては、今回、各グループに出題者が一人の形で実践したため、絵を描く児童からの質問は受けず、「話す」活動に重点をおいた形となったことが挙げられる。「理解したことを相手に返していく力」を付けるためには、この実践を生かして、一対一で相互にやりとりをしながらのお絵かきゲームなどの活動に発展していくことが必要であると考える。

実践事例３　単元名　「ニュース番組をつくろう！」

手だてキーワード

(1) 朝の１分間スピーチ

帯単元として、身近な共通の話題で短いスピーチを行ってきている。その中で「取材したことをニュースキャスター風に」という設定を加えることで、ニュース番組づくりへの伏線とした。

(2) ニュース番組づくり

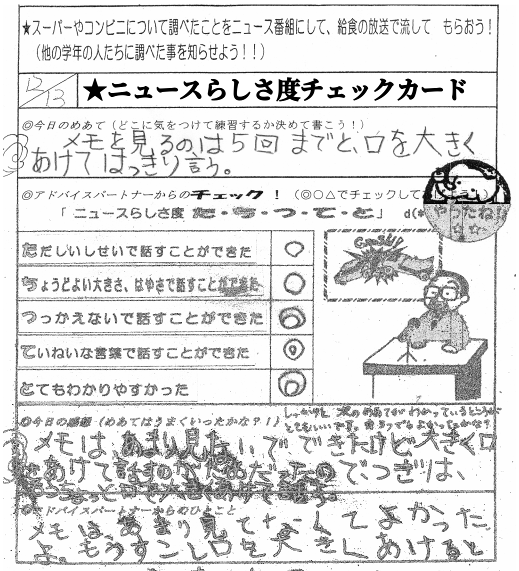
「総合的な学習の時間」で調べてきたことをいろいろな人に広く知らせることを目的として、設定した。実際に放送されているニュース番組を見ることでイメージをわかせ、役割分担を決め（キャスター・リポーター・コメンテーター）、台本を作成し、ビデオ撮影を行った。

(3) アドバイスパートナー

グループ内での練習及び自己評価の段階と、番組収録本番に向けた、学年全体での発表会によるアドバイスのやりとりとの間に、アドバイスパートナーとの練習として、グループ同士が練習を見合い、相互評価する段階を設定した。

(4) 学習カード

学習段階に応じて「ニュースらしさ度チェックカード」と「バッチリ聞いてますよ！カード」を活用した(第４図)。カードには評価欄、評価を受けての感想欄を設け、児童の評価意識の高まりを図った。



第４図　学習カード(例)

朝の１分間スピーチは、算数科「表とグラフ」の発展題材を、ニュース番組は「総合的な学習の時間」の「スーパー、コンビニのひみつをさぐれ！」をそれぞれ受けて設定した活動である。どちらの活動も、自分たちが調べたことを発表したいという目的意識がはっきりとあり、活動への意欲につながった。

また、ニュース番組については、実際に撮影をすることを伝えると、「給食の放送で全校のみんなに見てもらいたい」という声が上がり、活動への意欲と共に相手意識も持つことができた。同時に全学年が対象となるので、どのような伝え方が分かりやす

いのか、番組の構成はどうしたら良いかなどの、条件意識や技能意識にもつながった。
　ビデオ撮影することは、自分たちの話し方を確認することができ、正しい自己評価につながる。ただし、練習段階からのビデオ撮影は、時間や機材等諸条件の整備が難しい。そこで工夫したのがアドバイスパートナーとの練習である。
　児童は、相手グループからの評価をしっかり受けとめて、次の練習に生かすことができた。「早く練習したいなあ。」といった発言があちらこちらで上がり、この練習時間を楽しみにしている児童が多かった。
　学習カードについては、練習段階に応じて自己・他者評価の欄を設けた。めあての意識、自分の成長の実感ができ、次の練習に生かすことにつながった。
　課題としては、台本の作成と番組の中での役割分担が挙げられる。３年生の成長段階としては、台本の作成は必要である。しかし、台本に頼る比率が大きくなってしまい、棒読みのようになり、分かりやすく話す段階までいかない例もあった。途中から台本をメモに変更するなどの工夫が考えられる。
　役割分担では、キャスターとコメンテーターの立場の違いを理解することが３年生には難しかった。グループの人数を考えて分担したが、あえて本物の番組のような役割をおかず、リポーターを増やしキャスターとコメンテーターは兼任するなどの工夫が必要であったと考える。

研究のまとめ

「ごっこ活動」、「ゲーム活動」は、中学年の児童にとってわくわくするものであり、活動名の工夫などによる効果と併せて、児童の興味・関心や意欲を引き出すことができる。しかし、手だての工夫がなければ、ただ楽しいだけの活動で終わり、児童の学びはないということになってしまうおそれがある。
　今回、「話すこと・聞くこと」領域での「ごっこ活動」、「ゲーム活動」の中で、手だての工夫が児童の伝え合う力を高めることにつながるかを、三つの実践を通して検証した。
　全児童に「話す」、「聞く」両方の立場を経験させたり、出題の内容をグループで練り上げたり、学習カードに評価欄を設けたりといった各実践の工夫によって、「伝えたい相手に自分の思いを伝えることができる力」、「相手の思いを聴いて理解することができる力」、「理解したことを相手に返していくことができる力」が高まったことが見て取れた。このことから仮説については検証することができたと考える。ただし、ここで示した実践例がいつでも効果のあるものと考えてはならないだろう。伝え合う力を高めるためには、学習活動が人と人との心の通い合ったものである必要がある。もちろん学習活動自体が人間関係を作り出すこともあるが、学校生活のあらゆる場面で良い人間関係を育てていくことが大切である。
　今後の課題としては、指導計画作成上の留意点が挙げられる。各実践とも、他教科や「総合的な学習の時間」との関連があるものだが、指導計画でそのつながりを整理することは行わなかった。伝え合う力は、国語科の学習で育て、高めると共に、他の教科等にもつながっていくものである。今後の実践では、国語科で付けたい力、各教科等で付けたい力を構造図化するなどし、指導計画の作成に生かしていくことが必要であろう。

おわりに

　今年度は、「教科・国語科で育成する国語力」につながる、伝え合う力を高めるための指導法について、中学年「話すこと・聞くこと」領域における実践、検証を行った。
　今後は、「学校の教育活動全体で育成する国語力」と「教科・国語科で育成する国語力」の関連などを整理すると共に、他の学年や領域における伝え合う力を高める活動についても効果的な指導法を開発し、児童の国語力の向上を図っていきたい。
　稿末に当たり、懇切なる指導を賜った高木まさき横浜国立大学教授に謝意を申し上げる。また、本研究を進めるに当たり、多大な協力をいただいた調査研究協力員の先生方に深く感謝を申し上げる。
［調査研究協力員］
　鎌倉市立富士塚小学校　　石川　眞喜
　鎌倉市立第一小学校　　多那　光代
　大井町立大井小学校　　神戸　泉
［助言者］
　横浜国立大学教授　　高木　まさき

引用文献

文部省 1999 『小学校学習指導要領解説国語編』東洋館出版社 p.4
小森茂 1999 『新小学校教育課程講座〈国語〉』ぎょうせい p.41
小森茂 1999『「伝え合う力」の育成と音声言語の重視』明治図書 まえがき

参考文献

上条晴夫・菊池省三 2001 『楽しみながら思考力を鍛える小学校国語の学習ゲーム集』学事出版
早坂五郎 1995 『すぐ使える音声言語指導のアイディア』東洋館出版